

第一章 ウォーレン夫人の問題

「さて、ウォーレン夫人、申し訳ないのですが、私はあなたを助けることができないのです。私には他にやるべきことがあるのですよ」とシャーロック・ホームズは、自分のデスクの上にある紙を見ながら言った。

しかし、ウォーレン夫人は立ち去らなかつた。

「あなたは去年、私の下宿人であるホップズさんを助けました」とウォーレン夫人は、ホームズを見ながら言った。

「ええ、覚えています」とホームズは言った。

「ホップズさんは、あなたは優しくて助けになる人だと言っていました。どうしてあなたは私を助けることができないのですか？」とウォーレン夫人は尋ねた。

ホームズは彼女を見て、「分かりました、ウォーレン夫人、あなたの問題について私に教えてください。あなたの新しい下宿人がいつも彼の部屋にいて、あなたが彼に決して会わないということなら理解しています。それについては変なところは何もないですよ！」と云った。

「けど、私は本当に怖くて、眠ることができないのです」とウォーレン夫人は言った。

「朝から晩まで、彼のせかせかせした足音が私には聞こえるのですが、彼を見かけることは決してありません。どうして彼は隠れているのでしょうか？ 私の夫も心配していますが、彼は仕事で一日中いません。私は掃除をするのを助けてくれる女の子と家で二人きり、とても怖いんです」

ホームズは彼女を優しく見て、「お掛けになってください、ウォーレン夫人。私があなたを助けるということになったら、私は全てを知らなくてははいけません。お分かりですか？ 最も小さなことが、最も重要であり得るのですよ。その男は10日前に来て、あなたに2週間分の料金を支払ったとあなたはおっしゃった。それは正しいのでしょうか？」と云った。

「はい」とウォーレン夫人は言った。

「私はホップズさんに、家の最上階にある小さな居間と寝室のために、1週間につき2ポンドを支払うよう頼みました」

「それで？」とホームズは尋ねた。

「ホップズさんは『もし私が私の条件で部屋を持てるのであれば、1週間につき5ポンドをあなたに支払います』と言ったのです。私は貧しい女性です、ホームズさん、それに夫はあまりお金を稼ぎません。私には追加のお金が必要だったのです。その男は私に10ポンドを渡して、『私の条件を守ってくれるなら長い間、2週間ごとに10ポンド渡せます』と言いました」

「彼の条件は何だったのですか？」とホームズは尋ねた。

「ええ、彼は家の鍵を欲しがったのですが、それは問題ありませんでした。下宿人は家の鍵を欲しがることがよくあります。そして彼は、誰にも自分の邪魔をされたくなかつたのです」

「それについては何も変なところはありませんよ、ウォーレン夫人」とホームズは言った。

「はい、ですが私は彼と決して会わないのです。誰も彼に会わないのですよ！ 彼は最初の晩に家の外に出ただけなのです」

「ああ、彼は最初の晩に外出したのですね？」とホームズは尋ねた。

「はい、そして私たちがみんなベッドに入ったころ、彼はとても遅くに戻って来ました」とウォーレン夫人は言った。

「しかし、彼の食事は？」とホームズは尋ねた。

「ああ、私たちは彼がベルを鳴らしたら、食事を彼の部屋の外にある椅子の上に置くのです」とウォーレン夫人は言った。

「そして彼は食べ終わると、もう一度鳴らします。もし彼が何か欲しければ、彼はそれを1枚の紙切れに大文字で書いて、それを椅子の上に置くのです」

「彼は大文字で書くのですね？」とホームズは尋ねた。

「はい、鉛筆で書かれた単語だけで、それだけなのです」とウォーレン夫人は言った。

「見てください、ここに彼が書くメモがあります。これには SOAP (石けん) と書かれています。これはまた別のメモで、MATCH (マッチ) と書かれています。そして、これは彼が今朝書いたも

のなのですがね。それには DAILY GAZETTE (デイリー・ガゼット) と書かれているのです。私は毎朝、彼の朝食と一緒にその新聞を置くのです」

ウォーレン夫人がホームズに 2 枚の紙切れを渡すと、ホームズは関心を持ってそれらを眺めた。

「おやおや、ワトスン」とホームズは言った。

「これは確かにちょっと奇妙だよ。どうしてこの男は大文字で書くのだ？ 普通に書いた方がずっと簡単で早いじゃないか。ワトスン、君はどう思う？」

「彼はおそらく、ウォーレン夫人に自分の肉筆を見られたくないのだろう」と私は言った。

「けど、どうして？」とホームズは尋ねた。

「おそらく君は正しいよ、ワトスン。でもね、どうして彼のメッセージはそんなに短いんだ？ どうして彼は文で書かないのだろう？」

「全く分からない」と私は言った。